

児童の活動，思考を意識した授業展開について

～学びの足跡に着目して～

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系

教員養成特別コース

氏 名 眞井 裕生

キーワード：ノート ワークシート 思考 活動

実習責任教員 葛上 秀文

実習指導教員 江川 克弘

1. 課題設定の動機

私の今までの授業実践を振り返ると、児童がどんなことを行って、どのように考えていくのかを考えずに、私自身が良いと思い込んでいる授業の流れに沿った授業展開を行った。その結果、児童同士で話をする場面は多く見られたが、授業内で何を学ぶのかがわからないまま進行する。すでに児童の中に知識としてある事柄を再確認させ、作業をするという展開となり、児童が何も新しいことを得ることができずに終了することが少なからずあった。

理想とする授業と自分の授業との間に何があるのかを考えた時に、授業前に私が児童に何を教たいのかということのみを考えて授業を設計しているということに気が付いた。今児童が何をできるのかという既存の知識と、授業後に新しく何ができるようになったのか、そのためどのような授業を展開して児童の考えを促すのかということ意識するべきであると考えた。

学習において、多くが今までの授業で得た知識を利用し、課題に挑戦するようになっている。しかし、私の基礎インターンシップにおける授業実践では、前の授業で何を学んだのかを児童がわからない状態で終わってしまったことから、次の時間につなげることができなかった。児童が今までに何を学んだのかということ児童の学びの足跡であるノートやワークシートに残し

て置くことで、次の授業においても確認がすぐに取りれるようにしておくことで、児童のわかるという気持ちを助長し、効率的で効果的な学習となると考え、授業設計を行うこととした。

2. 基礎インターンシップにおける授業実践とその成果と課題

授業では、前時に学習した片仮名の分類の内から、外来語の片仮名が多く乗っている教科書のページを見て、主語と述語を取り入れた文を作ることができるようになることを目標としている。1つの例を取り上げ、文の内容を「片仮名」「主語」「述語」を板書にて明示することによって児童が既習事項である主語と動詞を意識できるようにし、片仮名が入っていることを確かめることができるようにした。その後児童自らのノートに片仮名を取り入れた文を書き、学級内で発表し、別の児童が「片仮名」「主語」「述語」に分類し、めあてが達成できていることを確認するという授業になっていた。

(1) 成果

成果としては、授業の前半にて主語と述語の確認をすることができ、多くの児童が主語と述語、片仮名をノートの中で区別して考えることができており、話し合いの中や発表において、1人の児童から出た文を主語と述語、片仮名を学級全体で区別して考えることができていた。

(2) 課題

本時の目標を達成するためだけの授業展開になっていた点が課題であったと考える。児童たちが機械的に片仮名や主語、述語を用いて文を作る授業内容になっており、主語や術後、片仮名をなぜ使用するのがわからないまま児童の活動となったため、学びが十分でない授業となった。本時の授業であれば、児童が1度片仮名の入った文を作り、皆にもっと伝わりやすい文を作るという活動にすることで、児童が自由に文を作ることができ、その後文をよりよくすることで、なぜ文の中に主語と述語を入れる理由を考えることができる授業にもなりえると考えた。

3. 総合インターンシップ I における授業実践とその成果と課題

総合インターンシップにおける授業では、一億より大きな数の単元を実施した。①児童は1億の数までを学習している。②本授業の後に、児童は10億という位を知るのみではなく、10億以上の数字の数の仕組を理解できるようになってほしい。③そのために、授業の中では10億の位を知るということに加えて、億の位の数の仕組も1～1000、1万～1000万までの数の仕組と同じく、1億、10億、100億、1000億と数えることができるということを考えていく授業にしていきたいと考えた。

本時では、「人口を表す数字から一億をこえる大きな数について調べていくこと、十億の位までの数について、読み方、書き方、仕組を理解する」ことをねらいとした。十億の位までの数を読むことができるようになることではなく、十億の位までの数字を読むことで、十億以上の数字を読んだり書いたりできるような仕組を

理解できるような授業にしたかった。

(1) 成果

授業導入部にて1億までの数字を読むことを確認し、児童が何ができる状態であるのかということ把握することができ、児童も割り算の学習ではなく、本授業からは数の読み方について学んでいくのだということがわかるようになっていた。

ワークシートにある位取り表において、色を効果的に使うことで一、十、百、千と増えていくことに注目させることができた。本授業において知ってほしい10億という位のみならず、100億、1000億の位を予想することもできるようになっていた。その予想や考え方を基に授業のまとめをできたことで、児童の学びにつながっているのではないかと感じる。

(2) 課題

まず、ワークシートと黒板の内容との間に乖離があった点が挙げられる。その結果児童がワークシートを書く際に黒板に注目すればよいのか、電子黒板を見ればよいのか、教科書を読めばよいのかわかりにくく、混乱しているように感じた。

ワークシートと黒板の内容に乖離が出ないようにすることは教師が常に意識し続けなければならない。さらに、狭い枠に数字や言葉を書くのではなく、広く枠を取り、児童がのびのびと考えることができるようなワークシートを用意していくことを意識するべきであると考えた。

本授業では、一億をこえる数に関して読むこと、かくことができ、仕組を知ることを目標としていた。その中で、かくことに関しては数字と漢字が入り混じったようにかいている児童がおり、達成できていないと思われるような部分が多くあった。

授業の導入部において読むことについて難を感じなかったため、数字を漢字で書くことに関しての難もないであろうと思い込んでしまったことが原因であると考え。児童が何をできるのかという点に関しての見通しが甘かったことを痛感した。さらに、教師の発表のさせ方が適していなかったため、児童がわかっていないということを教師が把握できなくなっていた。

「数字を漢字で書きましょう」という課題に対して、児童が読むことで発表するのではなく、書くことで発表していれば、数字と漢字が入り混じった答えに疑問が発生し、学級全体で確認することができたはずである。

4. 総合インターンシップⅡにおける授業実践とその成果と課題

総合インターンシップⅡにおいては、概数の単元の授業を2つ行った。

1つ目の授業の中では、 5 桁 $+5$ 桁や 5 桁 -5 桁の概算の方法を考える内容となっている。

2つ目の授業の中では、 4 桁 $\times 4$ 桁の概算の方法を考える内容となっている。

どちらの授業においても、総合インターンシップⅠにおいて気づかされた課題を基に、授業の計画を行い、児童の思考や活動の流れを意識するために①児童はいま何ができるのか②授業後に何ができるようになっているのか③そのために授業内で何をするのかという3点を意識し、授業に臨んだ。

(1) 成果

まず、今までの私の授業では児童から見ると、今から何をするのか、この授業で何を行うのかがわからなくなっている場面が多かった。今回の授業では2つの考え方があるとした後にその両方を児童から出すことができた。先に1つ目

の考え方をしますという形で今から何をするのかを明言することで児童が授業内で何を行うのかがわかりやすくなっていた。

次に、総合インターンシップⅠにおける授業での課題であった板書とワークシートを対応させた結果、「どこ見たらいいの？」や何を見て考えたらよいかのわからないという状況が減っていた。これからの授業においても、「黒板を見て書きましょう」や「教科書から考えてみましょう」という言葉がけを行って、児童が何を見て何をすればよいかということを意識できるように授業を展開していきたい。

さらに、積の概算の授業では、授業内でやったことを一緒に振り返り、まとめを導くことで、授業内容を確認しながらまとめを行うことができたため、正解している児童が増加していることから、児童が納得が得られていることが確かめられた。

最後に、積の概算の授業においては、かけ算の 4860×6138 を計算することはどうしても筆算を利用した計算になることから、多くの児童が難しさを感じていたことで、概数にしてから計算する方法で、 5000×6000 にすることで非常に短い時間で計算できるということに気づくことができていた。児童の立場にたったの難しさを考えていくことが和と差の概算の授業においても必要であったと考える。

(2) 課題

和と差の概算の授業における課題は2点あった。

1点目は授業内で2つの考え方を比べた際に、先に概数にしてから計算する方法が簡単だと感じている児童がいたが、一方で何人かの児童は本授業のねらいである簡単さについて気付くことができなかった。これは、私の概数に直すこ

とが簡単だろうという先入観からきており、概数に直すことに苦手意識を持っている児童の視点に立つと概数にしてから計算する方法が簡単だとは言いがたいだろう。さらに、足す数が2つのみであったことから、計算しきることが容易なためこのような発言が出たと考える。足す数を3つにすることで、足し算に難しさが生じ、概数にしてから計算する方法により簡単さが生まれるのではないかと考えた。

2点目は今日何を学んだのかということを確認するために重要なまとめの段階において、授業前は教科書にある整った言葉で書かれているまとめを写し、内容の確認を本時の授業の振り返りとともに行うことで、まとめの内容がわかるだろうと考えていた。しかし一部の児童しか納得していなかった。多少言葉が変になっていたとしても、児童の言葉から今日学んだことを抽出し、教師がきれいな日本語に変換することでまとめを作る方が良いのではないかと考えた。

積の概算の授業における課題は2点あった。

1点目は、本授業において児童の悩みどころになるだろうと想定していたがい数のかけ算を計算するときには上から1桁の概数にするのか、千の位までの概数にしてから計算するのかという発問に対して、挙手した児童が上から1桁の概数にするという正答を発表し、周りの児童もそれに納得している雰囲気であった。そのような雰囲気に押され、千の位までの概数にしなくてもよい理由を説明してしまう場面があった。千の位までの概数にしなくてもよいのかという発問を教師が行うのではなく、本当にそうなのかという問い返しを行って今一度児童に疑問を持たせることで、なぜ上から1桁の概数にする方法なのかということを感じさせるべきであったのではないかと考える。

2点目は、今回はノートを利用して授業を進めていき、児童が利用しているB5のノートが1ページで授業が終わるように設計していたが、1マスに1文字書いている児童と1マスに2文字書いている児童がおり、ノートが1ページに収まりきらず、不満げにしている児童がいた。ノートやワークシートを利用する授業を展開する際には、授業構想時に児童が書いていくであろう内容を書いたノートやワークシートを先に教師が作り、授業内で起こったようなずれを少なくしておくことを考えていかなければならない。さらに今回は、メンターの先生による徹底したノート指導があったため、授業時の児童にはノートを書いていく際のルールがある程度定着していたと思われる。ノートを書いていく際のルールも、本来であれば担任教師（私自身）が設定していくものであり、どのようなノートづくりのルールにしていくのかということも考えていかなければならない。

5. おわりに

私の目指す「児童の活動や思考を促す授業」に向けて、児童の学びの足跡、つまりノートやワークシートという観点から考えたことによって、授業改善の方向が定まった。今までは、その時の授業実践のよって改善の方向性が異なってきた。だが、今回の研究により、ノートやワークシートを利用することで児童の考えを促すことができるということがわかり、授業そのものが変わっていくということが実感できた。この二年間では改善しきれなかったが、今後改善し続けるものが見つかったことが大きな学びとなった。今回、課題として残った問い返しを行い、児童の考えを引き出すことのできる授業について研究していきたい。